

## 指導教員、リフレクションチームを決定するために！

第2期生が入学して約1ヶ月が過ぎました。教職大学院では、大学院生の長期実習の実践研究における主指導教員及び副指導教員を決定する時期になっています。また、長期実習はチームでリフレクション(省察≒ふりかえり)を行うことが多いため、その編成も並行して行われています。学校現場での実践研究をより充実させるためにも、指導教員とチームの決定は、極めて重要な作業です。今回は宇都宮大学教職大学院での指導教員の決定過程及びチームの編成過程について紹介します。

### ◆連携協力実習校での実践研究とリフレクション

教職大学院の大きな特徴の1つに、連携協力実習校での長期実習があります。長期実習と言っても、教員養成における教育実習とは全く性質が異なります。院生は長期実習を行いながら、そこでの経験やそこで得た知見を手がかりにして、院生自身が探究したいと考えている研究テーマについて実践的な研究を行うのです。

当然のことながら、研究テーマが違えば、実習校への入り方も異なります。学校全体を俯瞰できる立場で関わることもあれば、特定の学年や学級について長期実習を行うこともあります。そして、その取組について多角的に助言し合ったり、一緒になって考えたりするのが指導教員を含むチームの仲間たちです。金曜日の午後に行う「リフレクション」という科目で、チームリフレクションと称して、長期実習の取組を丁寧にふりかえり、その活動の意味づけであるとか、実践可能性であるとかをじっくり語り合い、議論します。時には、3時間以上の時間を費やすこともあります。リフレクションは、必要に応じて全体で行うこともありますが、チームで行うことがほとんどです。

そのチームと指導教員とを決定するのが、ちょうど今の時期なのです。

す。また、教員自身の専門領域について話をしたり、指導方針について話をしたりすることもあります。お互いをよく知ろうとするという点では、「院生と教員のお見合いのようなもの」との比喩が正しいかもしれません。



### ◆面談を繰り返して

指導教員の決定については、院生の希望を最大限に重視します。そのために、4月当初から、金曜日のリフレクションの時間には、1回20分から30分程度の教員との個人面談を繰り返してきました。リフレクション以外の時間にも院生の希望に応じて、面談を設定することもありました。

面談で話題になることは、院生にかかわることとして「大学院でやりたいと考えていること」「今までの自分自身の学び」「不安に思っていること・知りたいこと」等です。それについて、教員がアドバイスをしたり、疑問を解消したりしま

### ◆指導教員希望調査とチーム編成

5月の第2週までに院生は、第3希望まで書いた指導教員の希望調査を提出しました。その希望を受けて、専攻会議で「主指導教員及び副指導教員」を決定し、同時にチーム編成も行いました。院生の希望に添うように、そして今後のチームリフレクションが充実したものとなるように、あらゆる角度から検討を重ね、決定に至りました。院生一人ひとりの長期実習を支える実質的な組織になるわけですから、慎重に作業を進めたことは言うまでもありません。

もちろん、院生の学びは教職大学院全体で支えますし、院生一人ひとりを指導するのは、専任教員全員の責務です。そのことを前提にして、院生32名のチーム編成が終了しました。これから、いよいよチームとしての活動が、スタートすることになります。

### ◆次は連携協力実習校を

指導教員とチームが決定しましたので、今度は連携協力実習校の決定作業に入ります。昨年度からの継続でお世話になる学校もあります(特に2年生の場合)が、新たな学校をお願いする場合があります。連携協力校を希望してくださった学校の文書等をつぶさに確認し、院生の研究テーマとの関連を十分に考慮し、決定します。

最終的には、県教委・市教委代表と教職大学院で構成する「宇都宮大学教職大学院運営協議会」で正式決定します。その前段階で、連携協力校を希望してくださった学校には、市町教委了承のもと、問い合わせをすることがあると思います。御協力の程を宜しくお願いいたします。

ユニバーサルデザイン（以下、UD）とは、「調整または特別な設計を必要とすることなく、最大限可能な範囲ですべての人が使用することのできる製品、環境、計画およびサービスの設計」（障害者の権利に関する条約）とされています。当初は、建築や日常的に使用する台所用品・文房具等の製品の分野で広まり、特別支援教育が注目されるようになったことと相まって、教育の分野でも「授業のUD」として知られるようになってきました。「授業のUD」は、支援が必要な子も含めて「全員ができる・わかる」ためのさまざまな工夫として学校現場で広まっています。工夫の視点の代表的なものとしては、「焦点化」「視覚化」「共有化」が挙げられます（授業のUD研究会、2014）。教室の掲示物を減らす、1日のスケジュールを提示するなど、支援を必要とする子どもたちの特性に応じた教室環境の整備も、学校で取り入れられているUDの1つです。また、特に意識していなくても、日々行われている学校の実践の中にUDの視点が含まれていることも多々あります。

一方で「授業のUD」を技法として形式的に取り入れることの危険性も指摘されています。「授業のUD」は、子どもたちの実態、学級の雰囲気、授業のねらい等に関して、教師がさまざまな判断を働かせて初めて意味を持つものだと考えられます。さらに、これまでの授業のあり方を問い直すことなく、「全員ができる・わかる」を目指せば、ただ難易度を下げるだけになってしまいます。子どもによって学習方法や理解の道筋が異なることを意識し、その「多様性」を授業の中で生かしていこうとする発想が必要だと思われれます。

授業とは何なのか、教師の専門性とは何なのかといった問題と合わせて「授業のUD」について考えていくことが必要なのではないでしょうか。

## 《シリーズ:教職大学院授業紹介⑧ 「授業実践基礎」(選択科目[前期])》

授業を構想、立案し、実践していく力を総称して、「授業力」と呼ぶようになりました。誰もが自分自身の授業力を高めようと願い、様々な努力を進めます。その取り組みのひとつに授業研究があげられます。授業研究とは、公開される授業を参観し、授業改善のための議論をおこない、授業力を高めていく活動です。

本授業の名称に「基礎」とあるように、本授業は初学者（おもにストレートマスター）の授業力の向上をねらいとしています。具体的な目標は、(1) 授業観察の視点を身に付けること、(2) 授業研究会への参加を通して授業改善の方法を理解すること、(3) 学習指導案作成と模擬授業を通して授業構成力を高めていくこと、の3点です。以下にそれぞれの取り組みを紹介しましょう。

(1) では、授業のどこをどのように観察すればよいのかについて解説します。「教師」「教材」「子ども」などがなぜキーワードになるのか等、授業観察の基盤となる部分についての理解をめざします。

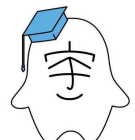


(2) では、附属小・中学校の公開研究発表会における授業参観と議論に参加することで、授業の実践を直に学習します。また、附属学校の研究テーマと個々の授業との関係については、専攻教員と附属学校教員が、教科・領域を網羅し、多角的に解説します。

(3) では、受講生自身が教科または領域から単元をひとつ選び、学習指導案を作成します。学習指導案作成の過程では、受講生と専攻教員間で個別指導が進められます。その後、教員と他の受講生を生徒役に見立てて、模擬授業が実践されます。実践後に、授業の各段階（導入、展開、終末）を振り返り、目標と学習活動の関係、教材の適否などを議論し、学び合います。

以上のように、さまざまな活動を通して、授業の構成や学習指導についての理解を深め、授業力が向上することが期待されます。

(担当代表: 人見久城)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻 (教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。